

文化勲章を受領して

小林 斗盞

昨年秋私は文化勲章拝領という光栄に浴しました。
明末十七世紀はじめに日本に渡来した篆刻藝術は、わが国ではあまりはやらない微々たる存在でしたが、昨秋図らずも私が勲章という荣誉にあずかり驚嘆し恐縮して

しまいました。これは私個人の問題ではなく、篆刻という大切な藝術が、わが国ではじめて顕彰された画期的なことで受止め、心から喜んで居ります。
篆刻は方寸の小面に作家の技術思考を凝縮する、極めてむずかし

いミニチュア藝術の粹ともいえるべきものです。私は永年篆刻に關する参考資料を蒐集し、著作に勉め、普及にも努力しましたが、わが國に於ては本格的に勉強する人がなかなか増えないのが最大の悩みです。今後この方面でも更に更に努めなければならぬと思うのです。どうか應援して下さいようお願いいたします。

文化勲章を受章された小林斗盞先生

牛窪 勲 (高一五回)

川越中学第三十一回卒業の大先輩である小林斗盞(庸造)先生が、平成十六年度の文化勲章受章という荣誉に浴されたことは、テレビ・新聞などの報道で、皆様ご存知のことでしょう。いうまでもなく文化勲章は、我が国の文化の発展に關して顕著な功績のあつた者に対して授与される、最高の荣誉です。

篆刻という芸術は、中国においては二千数百年の歴史をもつ「印章」を源とし、現在では書の一分野として多くの人がこれを楽しむようになっていますが、先生はその最高峰に立たれているわけです。

川越市大手町の印章店の三代目として生まれた先生は、十五歳の頃から篆刻の勉強を始め、書道・文字学・漢籍などもそれぞれの道の権威に師事し、努力を重ねられました。戦後は日展を主な作品発表の場とし、昭和五十一年に文部大臣賞、昭和五十九年には恩賜賞・日本芸術院賞を受賞し、平成五年には日本芸術院会員に就任されました。近年は日中両國において大規模な個展を次々と催されてもいます。

その作風は、中国の古印・近代の篆刻を深く研究した成果を踏まえた高い知性と風格を誇り、現在の日中印壇において並ぶ者のない境地に到達されています。ことに甲骨文・金文という古代文字を駆使した作品は、先生独絶の世界と言えます。

刻印ばかりでなく、中国、明清の

書画・篆刻の研究・紹介においても第一人者であり、『中国篆刻叢刊』(全四十巻)、『中国璽印類編』を初めとする著作も数えきれませんし、永い時間をかけて蒐められた貴重な文物は、その散逸を恐れ、一括して東京国立博物館に寄贈されています。

これらの功績により平成十一年度文化功労者として顕章され、現在は、日展顧問・読売書法会最高顧問・全日本篆刻連盟会長などをつとめ、日本の書壇をリードされています。

本年二月十三日、所属される謙慎書道会主催による文化勲章受章祝賀会が、帝国ホテル孔雀の間において催されました。

来賓一四〇名あまり、総員七〇〇名の盛大な祝宴は、常磐津英壽社中の演奏により、中村芝翫文が舞うという人間国宝の共演で始まり、中国大使・日本芸術院長の祝辞のあと、後藤田正晴氏の音頭で祝杯を挙げました。小林先生の謝辞のあとは会場の空気がなごみ、夢のような時間はまたたく間に過ぎ、二時間あまりの宴も無事お開きとなりました。先生秘蔵の印をあつめた『斗盞蔵印』という豪華本を手にして帝国ホテルを後にした参会者は、家に帰ってその内容にまた驚くという次第で、幸せな一日が終ったことでした。

同窓の縁もあって小林先生に師事できた者として、この小文を綴る機会を与えられたことを感謝しています。



瀟酒



絶聖 棄知